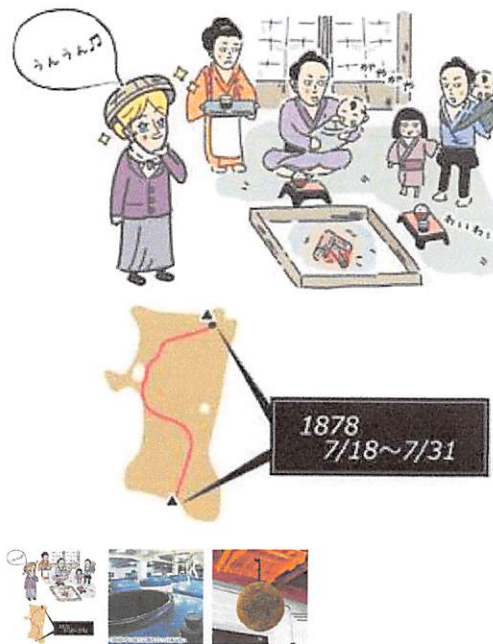


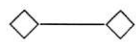
# イザベラ・バード秋田の旅（12）日本と英国

2018年12月30日 掲載



「日本奥地紀行」で、イザベラ・バードは英国読者の便宜を図るため「英語に同義語のない日本語解説」を載せている。「大名」「仏壇」など約50語が並ぶ中、唯一の飲食物として「酒」（日本酒）もあり、「アルコール分11～17%の米で造ったビール」と紹介されている。

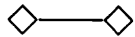
牧師の娘に生まれたバードにとって飲酒は「悪習」だった。当時の英国ではパブ（酒場）にたむろする労働者階級の飲酒トラブルが問題化し、バードも関心を寄せていたという。日本奥地紀行にも、酔っぱらったままバードの馬を引く馬子や泥酔するアイヌが登場する。だが「日本語解説」に載せるほど酒に関心を払っていたバードは、一方的な見方ばかりはしなかった。



1878（明治11）年7月26日、羽州街道を北上していたバードは、森岳（三種町森岳）周辺でいくつもの造り酒屋があることに目を留めた。それをきっかけに日本酒に関する詳細な解説を始める。神代からの歴史があること、日本の税収の核となっていること、パスツールが低温殺菌法を開発する3世紀も前から日本では酒造りに「火入れ」を取り入れていたこと。バードは「ビールなくして英国がない以上に酒なくして日本はない」とした上で、日本では特別な場面で酒を飲むのが伝統的な儀礼であることも指摘し

た。

それを裏付ける場面にも立ち会っている。数日前、バードは久保田（秋田市）で富裕な商人の結婚式に招かれた。定められた形式にのっとり酒を交互の飲み干す三三九度の様子をじっくりと観察。酒によるこの儀式が「結婚式の中心をなす」と受け止めた。久保田で見た伝統的な婚儀は、嗜好（しこう）品にとどまらない酒の重要性を強く印象付けたようだ。



歴史も文化も宗教も違う英国と日本。双方を比べるのは不公平と考えていたバードだが、時には英国人からみた日本人の美点や欠点を率直に語っている。

7月30日、バードは白沢（大館市白沢）で庶民の暮らしを見ながらこれまで出会った日本人の姿を思い浮かべていた。大声で話したりする日本人の行為に不快感を示す一方、英国の労働者階級を引き合いに出しつつ、日本の家庭は肯定的に記している。「貧しかろうとも人々は時を楽しく過ごすし、何はさておき子どもというものが家庭の絆になっている」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」）

大東文化大の山口みどり教授（ジェンダー史）は「19世紀、バードも属した中流階級では家族や家庭を大事にする風潮が広まっていた。日本の貧しい家庭にも温かな結びつきがあることに関心を持ったのではないか」と指摘する。

だが子どもへの愛情の示し方について、日本人は英国人を上回っていたようだ。当時の日本は、英国初代駐日公使のオールコックが「子どもの楽園」と評すほど子どもを溺愛する国だった。白沢で触れた子どもを中心とした安らぎのある家庭は、バードにとって「本当の日本」を体現する光景だったのである。

<終わり>